

一 日本の戦国武将は漢詩を嗜んだ

「左遷至藍関示姪孫湘」

(左遷せられて藍関に至り姪孫の湘に示す) 韓愈

一封朝奏九重天

一封朝に奏す九重の天

一封 一通の上奏文

夕貶潮州路八千

夕べに潮州に貶せらる路八千

貶 流される

欲爲聖明除弊事

聖明の爲に弊事を除かんと欲す

聖明 天子

肯將衰朽惜殘年

肯えて衰朽を將つて殘年を惜しまんや

雲橫秦嶺家何在

雲は秦嶺に横たわりて家何くにか在る

秦嶺 山脈の名

雪擁藍関馬不前

雪は藍関を擁して馬前まず藍関 関所の名

知汝遠來応有意

知る汝の遠く來たる応に意有るべし

汝 姪孫の湘のこと

好収吾骨瘴江辺

好し吾が骨を収めよ瘴江の辺に

瘴江 毒氣の立ち込める江

「題不識庵擊機山図」

頼山陽

鞭声肅肅夜過河

鞭声肅々夜河を過る

鞭 馬のむち

曉見千兵擁大牙

曉に見る千兵大牙を擁するを

大牙 大将旗

遺恨十年磨一劍

遺恨なり十年一劍を磨き

流星光底逸長蛇

流星光底長蛇を逸す 流星光底 打ち下ろす劍光の

「九月十三夜陣中作」

(九月十三夜陣中の作) 上杉謙信

霜滿軍營秋氣清

霜は軍營に満ちて秋氣清し

數行過雁月三更

數行の過雁月三更 三更 夜十二時

越山併得能州景

越山併せ得たり能州の景 能州 加賀の能登地方

遮莫家鄉憶遠征

さもあらばあれ家鄉遠征を憶うを 越山 越後越中の山々

「偶作」

(偶作) 武田信玄

鏖殺江南十萬兵

鏖殺す江南十万の兵

腰間一劍血猶腥

腰間の一劍血猶腥し

豎僧不識山川主

豎僧は識らず山川の主 豎僧 愚かなる山僧

向我慇懃問姓名

我に向かつて慇懃姓名を問う

「寄濃州僧」

(濃州の僧に寄す) 武田信玄

気似岐陽九月寒 岐陽||岐阜
 三冬六出灑朱欄 三冬||冬三カ月六出||雪
 多情尚遇風流客 多情な私風流な貴僧
 共対士峰吟雪看 共に士峰に對し雪に吟じ看ん 士峰||富士山

「織女惜別」

(織女別れを惜しむ) 直江兼続

二星何恨隔河逢 二星||ひこ星と織女星
 今夜相逢散鬱胸 今夜相逢いて鬱胸を散ず
 情語未終先洒淚 情語未だ終わらず先ず涙を洒ぐ
 合歡枕下五更鐘 合歡の枕下五更の鐘 五更||午前四時

「題岩崎谷洞」

(岩崎谷洞に題す) 西郷隆盛

百戰無功半歲間 百戦功無く半歳の間
 首邱幸得返家山 首邱幸いに家山に返るを得たり 首邱||故郷を思うこと
 笑儂向死如仙客 笑う儂死に 向として仙客の如く 仙客||仙人
 尽日洞中棋響閑 尽日洞中棋響閑なり棋||囲碁

二日本の文人は漢詩を読んでいた

「入若耶溪」

王籍

蟬噪林逾靜 蟬噪いで林逾よ静かに
 鳥鳴山更幽 鳥鳴いて山更に幽なり

王安石の集句詩

風定花猶落 風定まりて花猶を落ち
 鳥鳴山更幽 鳥鳴いて山更に幽なり

「夏日閑居」

張籍 (五言律詩)

無事門多閉 事無く門多く閉す
 偏知夏日長 偏に知る夏日の長きを
 早蟬声寂寞 早蟬声は寂寞
 新竹氣清涼 新竹氣は清涼
 閑対臨書案 閑かに対す臨書の案

看移曬藥牀。自憐歸未得，猶寄在班行。

「無題」

(七言律詩) 夏目漱石

依稀暮色月離草
 錯落秋声風在林
 眼耳双忘身亦失
 空中独唱白雲吟

依稀たる暮色月は草を離れ衣稀いぎおぼろなる
 錯落さくらくたる秋声風は林あに在り錯落あ入り乱れる
 眼耳双つながら忘れ身まも亦しつた失す
 空中に独り唱う白雲の吟

「赤壁」

(赤壁) 杜牧

折戟沈沙鐵未銷
 自將磨洗認前朝
 東風不興周郎便
 銅雀春深鎖二喬

折戟せつげき沙に沈んで鉄未だ銷しょうせず折戟せつげき折れたほこ
 自おのずから磨洗を將もつて前朝を認む前朝ぜんてう唐の前の六朝時代
 東風周郎しゅうろうが与ために便べんならずんば周郎しゅうろう呉の將軍銅雀とうせき曹操の別荘
 銅雀春深うして二喬にきやうを鎖とぎさん二喬にきやう喬公の二人の娘

「西南役後過田原」

(西南の役後田原を過ぐ) 乃木希典

田原一望秋將老
 新戰場荒草木摧
 忽見村童三兩四
 砂中拾得彈丸来

田原たばる一望秋將まほに老いんとす
 新戰場荒れて草木くた摧く
 忽たちまち見る村童さんりやうし三兩四
 砂中彈丸しゅうとんぐを拾得して来る

三科拳の試験

「夜行」

(夜に行く) 晁冲之

老去功名意轉疎
 独騎瘦馬適長途
 孤村到曉猶燈火
 知有人家夜讀書

老い去りて功名の意うた轉おろそた疎おろそかなり
 独り瘦せ馬に騎のり長き途を適ゆく
 孤村曉あけに到るも猶なお灯火
 知る人家夜書を読む有るを

「再下第」

(再び下第す) 孟郊

下第かだい落第

一夕九起嗟
 夢短不到家
 兩度長安陌
 空將淚見花

一夕に九たび起きて嗟なげく
 夢は短く家に到らず
 兩度長安の陌みちに
 空しく涙を將もつて花を見る

「登科后」

孟郊

昔日齷齪不足嗟
 今日曠蕩思無涯
 春風得意馬蹄疾
 一日看尽長安花

これまでの不運をあくせくと何であるように嗟いたのやら
 今日の前途洋々、思い出せばかぎりない感懐だ
 春風も吹くし、おれも得意だし、馬の足も軽い
 一日中見歩いた長安の花はなんと美しいことか

「遊子吟」

孟郊

慈母手中綫
 臨行密密縫
 誰言寸草心

遊子身上衣
 意恐遲々歸
 報得三春暉

「九月九日憶山中兄弟」

(九月九日山中の兄弟を憶う)

王維

独在異鄉爲異客
 每逢佳節倍思親
 遙知兄弟登高處
 遍插茱萸少一人

独り異郷にあつて異客となり 異郷||長安
 佳節に逢う毎に倍ます親を思う
 遙かに知る兄弟高きに登る處
 遍く茱萸を挿すも一人を少かん

茱萸||ハジカミ邪氣払いの草

「夫下第」

(夫の下第)

良人的的有奇才
 何事年年被放回
 如今妾面羞君面
 君若来時近夜来

良人は的々として奇才有るに
 何事ぞ年々放たれて回る
 如今妾が面は君の面を羞ず
 君若し来たる時は夜の近きに来れ

的々||明るく輝く

「聞夫杜羔登第」

(夫杜羔が及第したと聞いて)

長安此去無多地
 鬱鬱葱葱佳氣浮
 良人得意正年少
 今夜醉眠何処樓

長安此去無多の地
 鬱々葱葱として佳氣浮かぶ
 良人得意にして正に年少
 今夜酔いて何処の樓にか眠らん

無多||氣楽な
 葱々||草木が青々としげる

「己亥歳」

(己亥の歳) 曹松己亥二八七九年

澤国江山入戰圖

沢国の江山戦図に入る

沢国 水郷

生民何計樂樵蘇

生民何の計あつてか樵蘇を楽しまん

生民 人々 樵・蘇

憑君莫話封侯事

君に憑つて話す莫れ封侯の事封侯 手柄をたて大名になる

一将功成萬骨枯

一将功成つて万骨枯る

「登科后解嘲」

詹義

讀尽詩書五六担

車にいっぱい積んだほどの経書を読んで

老来方得一青衫

老いこけてからやっとありついた官僚様の肩書

佳人問我年多少

娘たちに年はいくつと問われたら

青衫 下級官吏

五十年前二十三

五十年前二十三の美少年さ

「哭孟寂」

(孟寂を哭す) 張籍

曲江院裏題名処

曲江院裏題名の処

十九人中最年少

十九人中最年少

今日春光君不見

今日春光君を見ず

杏花零落寺門前

杏花零落す寺門の前

「贈裴思謙」

(裴思謙に贈る)

銀釭斜背解鳴璫

銀釭斜背鳴璫を解き

鳴璫 耳だま釭 ともし火

小語偷声賀玉郎

小語偷声玉郎を賀す

玉郎 合格したあなた

從此不知蘭麝貴

此れ従り知らず蘭麝の貴きを

蘭麝 蘭の香と麝香

夜来新染桂枝香

夜来新たに染む桂枝の香

【参考】競渡詩

唐・盧肇

一作及第後江寧觀競渡寄袁州刺史成應元

石溪久住思端午，館驛樓前看發機。

鼙鼓動時雷隱隱，獸頭凌處雪微微。

衝波突出入齊讖，躍浪爭先鳥退飛。

向道是龍剛不信，果然奪得錦標歸。

「偶興」

羅隱らゐん

遂隊隨行二十

隊を遂おい行に随う二十春

曲江池畔避車塵

曲江池畔車塵を避く曲江池ハ進士及第者が天子の祝宴を賜る処

如今贏得將衰老

如今じよこんか贏ち得たり衰老を將もつて

閑看人間得意人

閑じんかんに看る人間得意の人 人間ハこの世

四 詩人が左遷された理由

「自詠」菅原道真

離家三四月

落涙百千行

万事皆如夢

時時仰彼蒼

家ハ京の桑原くわばらの自家（雷対策でクワバラくと唱となえるのは雷神

なつた道真が自分の自宅、桑原には雷を落とさないはずだ、との意

彼蒼ハ天をさす

五 李白宮廷から追放される

「清平調詞三首其二」

（清平調詞三首の其の二）李白

一枝紅艷露凝香

一枝の紅艷露香を凝こらす

雲雨巫山枉斷腸

雲雨ふ巫山むな枉しく断腸

借問漢宮誰得似

借問しゃもんす漢宮誰か似るを得たる

可憐飛燕倚新粧

可憐なり飛燕新粧よに倚る

十二 漢詩で殺される

〔代悲白頭翁〕

(白頭を悲しむ翁に代わりて) 劉廷芝

洛陽城東桃李花	洛陽城東桃李の花
飛來飛去落誰家	飛び来たり飛び去りて誰が家にか落つ
洛陽女兒惜顔色	洛陽の女兒顔色を惜しみ
行逢落花長嘆息	行く行く落花に逢いて長嘆息す
今年花落顔色改	今年花落ちて顔色改まり
明年花開復誰在	明年花開きて復た誰か ^ま 在る
已見松柏摧爲薪	已 ^{すで} に見る松柏摧 ^{くだか} かれて薪 ^{まき} となるを
更聞桑田變成海	更に聞く桑田 ^{そうでん} の変じて海となるを
古人無復洛城東	古人復た洛城の東に無く
今人還對落花風	今人還 ^ま た對す落花の風
年年歲歲花相似	年々歲々花相似たり
歲歲年年人不同	歲々年々人同じからず (以下十四句は省略)

桑田||くわ畑、時勢が変わるたとえ

漢詩鑑賞事典(石川忠久) 86頁

十三 傑作の漢詩とは

〔涼州詞〕

(涼州詞) 王翰

葡萄酒美酒夜光杯	葡萄酒の美酒夜光の杯	夜光杯 白玉の杯
欲飲琵琶馬上催	飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す	琵琶 西域の樂器
醉臥沙場君莫笑	酔うて沙場に臥すとも君笑うこと莫かれ	沙場 砂漠
古來征戰幾人回	古來征戰幾人か回る	漢詩鑑賞事典(石川忠久) 133頁

〔送元二使安西〕

(元二の安西に使いを送る) 王維元二||元は姓、二番目の男

渭城朝雨浥輕塵	渭城の朝雨輕塵を浥す	渭水の向かい側の咸陽
客舍青青柳色新	客舍青青柳色新たなり	
勸君更盡一杯酒	君に勸む更に尽くせ一杯の酒	
西出陽關無故人	西のかた陽關を出ずれば故人無からん	故人 友人

「江雪」

千山鳥飛絶
萬径人蹤滅
孤舟蓑笠翁
独釣寒江雪

(江雪) 柳宗元

千山鳥飛ぶこと絶え
万径人蹤滅す
孤舟蓑笠の翁
独り釣る寒江の雪

蓑笠Ⅱみのがさ

漢詩鑑賞事典(石川忠久) 407頁

「冬夜読書」

雪擁山堂樹影深
檐鈴不動夜沈沈
閑収乱帙思疑義
一穗青燈萬古心

(冬夜読書) 菅茶山

雪は山堂を擁して樹影深し
檐鈴動かず夜沈々
閑に乱帙を収めて疑義を思う
一穗の青灯万古の心

檐鈴Ⅱ軒先の吊るした鈴 乱帙Ⅱ取り散らかした書籍 漢詩鑑賞事典(石川忠久) 824頁

「飲酒」

結廬在人境 而無車馬喧
問君何能爾 心遠地自偏
采菊東籬下 悠然見南山
山氣日夕佳 飛鳥相與還
此中有真意 欲辨已忘言

(飲酒) 陶淵明

廬を結んで人境に在り 而も車馬の喧しき無し
君に問う何ぞ能く爾るやと 心遠ければ地自から偏なり
菊を東籬の下に采り 悠然として南山を見る
山氣日夕に佳く 飛鳥相与に還る
此の中に真意有り 弁せんと欲すれば已に言を忘る

漢詩鑑賞事典(石川忠久) 49頁

十九 後宮にも官位があつた

「袍中詩」

沙場征戍客
寒苦若為眠
戰袍經手作
知落阿誰辺
蓄意多添線
含情更著綿
今生已過也
願結後生縁

(袍中の詩)

沙場征戍の客
寒苦若為にしてか眠らん
戦袍手を経て作る
知んぬ阿誰の辺にか落つる
意を蓄え多く線を添え
情を含み更に綿を著す
今生已に過ぎたる也
願わくは結ばん後生の縁

戦袍Ⅱ軍衣

「後宮詞」

(後宮の詞) 白樂天

雨露由来一点恩
争能偏布及千門
三千宮女臙脂面
幾箇春来無淚痕

雨露由来一点の恩
争でか能く遍く布きて千門に及ばん 争いかに どうして
三千の宮女臙脂えんじの面
幾箇いくたりか春来りて涙痕なみこん無からん
臙脂えんじ べにおしろい

「題花葉詩」

唐・德宗宮人

一入深宮裏
無由得見春
題詩花葉上
寄与接流人

一たび深宮うちの裏に入り
春を見得るうに由よし無し
詩を花葉しるの上に題し
流れに接ちかづく人に寄与せん

北方民族について

◆ここで辺塞詩へんさいしによって、出征させられている兵士の気持ちに詩句でみてみよう。王翰おうかんの「涼州詞」

酔臥沙場君莫笑
古來征戰幾人回

王之渙おうしかんの「涼州詞」

羌笛何須怨楊柳
春光不度玉門關

岑参しんじんの「磧中作」

今夜不知何処宿
平沙万里絶人烟

曹松の「己亥歲」

憑君莫話封侯事
一將功成万骨枯

常建の「塞下曲其二」

勸體ことごとく 尽 是長城卒
日暮沙場飛作灰

陳陶の「隴西行二首」

可憐無定河辺骨
猶是春閨夢裏人

(故郷の妻は夫の帰りを夢みる)

杜甫の「兵車行」

古來白骨無人收
新鬼煩冤旧鬼哭

「寄夫」

(夫に寄す)

陳玉蘭

夫戍辺関妾在呉

夫は辺関まもを成り 妾は呉あに在り

西風吹妾妾憂夫

西風あきかぜ 妾われを吹き 妾は夫うれを憂う

一行書信千行淚

一行てがみの書信 千行の淚

寒到君辺衣到無

寒は君の辺いなに到るも 衣は到れりや無や

つぎの李白の子夜呉歌の詩は良く知られている。

「子夜呉歌」

(子夜呉歌)

李白

長安一片月 長安一片の月

萬戸擣衣声 万戸衣を擣つの声

秋風吹不尽 秋風吹いて尽きず

總是玉関情 総べて是れ玉関の情

何日平胡虜 何れの日にか胡虜を平らげて

良人罷遠征 良人遠征を罷めん

擣衣 || 布を砧きぬたにのせて打つ

玉関 || 玉門関 西域の関所

胡虜 || 匈奴をさす

「磧中作」

(磧中の作)

岑参

磧中 || 石の多い沙漠

走馬西来欲到天

馬を走らせ西に來りて天に至らんと欲す

辞家見月兩回圓

家を辞して月の兩回円まじかなるを見る 兩回 || 二カ月間

今夜不知何処宿

今夜は知らず何れの処にか宿するを

平沙萬里絶人煙

平沙万里 人煙を絶つ

「敕勒歌」

(敕勒の歌)

斛律金

(鮮卑族の武将。鮮卑の歌を漢語に訳した)

敕勒川

敕勒の川

敕勒 || トルコ (チュルク) を音訳した漢字で

陰山下

陰山の下

鉄勒とか突厥などと書かれた。

天似穹廬

天は穹廬きゆうろうに似て

穹廬 || ドーム型のテント。ゲル。パオ。

籠蓋四野

四野を籠蓋ろうがいす

籠蓋 || かごをかぶせるように掩う

天蒼蒼

天は蒼々

野茫茫

野は茫茫

風吹草低見牛羊

風吹き草低たれて牛羊見あらわる

「癸巳五月三日北渡其一」

(癸巳五月三日北に渡る)

金 元好問

道旁僵臥滿累囚

道旁に僵たおれ臥ふして 累囚満ち

過去旃車似水流

過ぎ去る旃車せんは 水の流るるに似たり 旃車 || 幌馬車

紅粉哭随回鶻馬

紅粉は哭しつっかいこつ回鶻の馬に随い 紅粉 || 若い女 回鶻 || 蒙古軍

為誰一步一迴頭

誰の為にか 一步ごとに 一ひとたび頭を回らす

道ばたには縄で縛られた囚人たちがごろごろ倒れ伏していた。通り過ぎる幌馬車は水の流れのように続いた。若い女たちは泣き泣き蒙古軍の馬について行く。誰を見ようとして一歩ごとに後ろを振り返るのだろうか。

「其二」

白骨縦横似乱麻	白骨縦横 乱麻に似たり
幾年桑梓變龍沙	幾年か桑梓 龍沙に變ず 桑梓 〓 郷里 龍沙 〓 砂漠
只知河朔生靈盡	只だ知る 河朔 生靈の尽くるを 河朔 〓 河北
破屋疎煙却数家	破屋 疎煙 却って数家

「書憤」

(憤りを書す)

南宋 陸游

早歲那知世事難	早歲那ぞ知らん 世事の難きを
中原北望氣如山	中原 北望して氣 山の如し 中原 〓 中国中心部
樓船夜雪瓜洲渡	樓船 夜雪 瓜洲の渡 樓船 〓 やぐらを組んだ戦艦
鉄馬秋風大散関	鉄馬 秋風 大散関 瓜洲 〓 江蘇省の南
塞上長城空自許	塞上長城空しく自ら許せしも 大散関 〓 金の国境の関所
鏡中衰鬢已先斑	鏡中衰鬢 已に先に斑なり
出師一表真名世	出師一表 真に世に名あり 出師一表 〓 諸葛亮のこと
千載誰堪伯仲間	千載誰か堪えたる伯仲の間